（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	鯖江 秀樹
論文題目	芸術と政治：ファシズム期イタリアの造形芸術とその思想に関する研究		

（論文内容の要旨）

本論文は、イタリアのファシズム期における特異な文化様態を、芸術およびその批評的言説と政治との関連を通して解明しようとするものである。ナチズムやスターリニズムがモダニズム芸術や前衛芸術を弾圧したのとは対照的に、ファシズムはこれを否定したり弾圧したりすることは基本的になかった。多くの画家や建築家たちに対して、さまざまな芸術的表現や実験的な試みを実践するという相対的な自由が緩やかに認められ、建築コンペや美術展などによって、ファシズム政権がこれを積極的にプロモートすることも少なくなかった。そこが同じ全体主義政権であっても、「退廃芸術」と称してモダニズム芸術をつぶしにかかったナチズムとの大きな違いになっている。本論文はこの点に注目し、特に当時の美術批評や建築批評等のイタリア語一次資料を丹念に解読することによって、このイタリア・ファシズムにおける芸術と政治との錯綜した独特の関係に光を当てようとしている。

こうした問題意識を踏まえて、本論文は五つの章から構成されている。第Ⅰ章「政治のなかの芸術：ピエロ･ゴベッティの絵画論」では、ピエロ･ゴベッティという左翼の思想家が、画家フェリーチェ･カゾラーティをいかに評価し批評したかがたどられる。夭折したゴベッティによって革新的な画家として高く評されたカゾラーティは、この思想家の死後、体制側の批評家によってまったく逆の解釈が施されることで、ファシズムが新しい芸術運動をもみずからの内に取り込もうと画策していること、さらに、芸術を政治的統一のために利用しようとしている戦略が具体的に明らかにされる。

第Ⅱ章「芸術から国家へ：ジュゼッペ・ボッタイの文化政策」では、ムッソリーニのファシズム政権下で、実際に文化・芸術政策を担当した政治家にして批評家ジュゼッペ・ボッタイに光が当てられる。ファシズム芸術はいかにあるべきか、この問いに正面から立ち向かったボッタイは、非常に興味深いことにも、あからさまな政治的プロパガンダを意図したような芸術を「キッチュ」として批判する。つまり、ストレートに時の政権を持ち上げるような芸術を、この屈折したファシストは認めようとしない。芸術家たちに相対的な自由を与えることこそが重要だと考えて、反体制的芸術をも懐柔策によって取り込もうとしたのである。こうしたボッタイ独自の文化政策が、彼が書き残した批評のテクストなどから、具体的かつ丹念にたどられている。

第Ⅲ章「美術史のなかの政治：リオネッロ・ヴェントゥールの芸術論争」では、当時の高名な美術史家にして批評家リオネッロ・ヴェントゥーリのテクストが検討される。ヴェントゥーリは、その反ファシズムの政治的立場からフランスへの亡命を余儀なくされ、ファシズム政権崩壊後は英雄として祖国に迎え入れられた美術史家である。だが、きわめて興味深いことにも、そのテクスト、特に世界的に広く読まれてきた『プリミティヴの趣味』などを詳細に検討してみると、そこで賞賛されている「精神主義」

が、ファシズムの精神主義とも相通じる性格をもつことがわかる。生命力、精神性、啓示、光などといった用語は、またファシズムが好んでいたものでもあった。意識するしないにかかわらず、知の領域には抜きさしがたくも政治性が忍び込んでいることが明らかにされる。

続く第Ⅳ章「政治へ向かう建築：エドアルド・ペルシコのメタ批評」では、ファシズム期における建築とその批評の問題が取り上げられる。偽－古典古代風の建築のみを承認していたナチズムとは異なって、イタリアでは、モダニズム建築も基本的に排除されることはなかった。しかも、時の政権はさまざまなコンペを布告して建築を奨励し、都市の改造に乗り出していた。こうした状況下で、新たに浮上してきたのが、建築における「ローマ性」と「地中海性」とは何かといった問題であった。これらはとりもなおさず、イタリアに固有の建築のルーツがどこにあるのかを探ろうとするもので、それ自体、ファシズムが歓迎する国家主義的で民族主義的な理念であった。が、モダニズム建築の合理主義や機能主義のルーツを、こうした「ローマ性」や「地中海性」の内に見出そうとした点にイタリア･ファシズムの特徴がある。

最後の第Ⅴ章では、再びボッタイの文化政策が検討される。ナチズムの人種法に反対していたボッタイは、「血統」よりも「伝統」を重んじることで、芸術作品の組織的で系統的な保存･修復等をはじめて国家政策として取り入れた点などが明らかにされる。

ファシズムと反ファシズム、政治と芸術との関係が、弾圧や抵抗といった従来の図式では片付けることのできない、微妙で錯綜した問題をはらんでいること、ファシズムは芸術表現の相対的自由を演出することで巧みに民意を操作していったことが、本論文から歴史的かつ思想的に明らかにされる。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文の最もすぐれた独自性は、その問題意識の明晰さと、それを解明していく方法の新しさにある。すなわち具体的には、ゴベッティ、ボッタイ、ヴェントゥーリ、ペルシコといった、それぞれ政治的立場を異にする批評家や学者たちの言説を丹念に読み解くことで、ファシズムにおける芸術と政治とのきわめて錯綜した関係を解明しようとした点である。こうした方法論に基づいてファシズム期の芸術文化を論じた研究は、少なくともわが国ではこれまでに例がなく、その意味で高く評価することができる。これらの批評家たちは、わが国ではあまり広く知られているとはいえないが、当時の状況下にあって、非常に重要な役回りを演じた、時代の隠れた主役たちであったことが、本論文から生き生きと伝わってくる。

次に本論文の評価すべき点は、同時代を生きた偉大な哲学者や思想家、具体的にはベネデット・クローチェ、ジョヴァンニ・ジェンティーレ、アントニオ・グラムシに対しても周到に目配りをきかせ、彼らの言動が、美術や建築の傾向、さらには批評の動向にいかに間接的に影響を与えているかについて論じている点である。たとえば、政治的立場はまったく正反対でありながらも、その「共同体主義」の思想、「自由と組織化」という発想において、グラムシとボッタイとがある種の共通性を持つといった指摘は、これまでの研究ではなされてこなかったことであり、本論文独自の主張として注目に値する。

三番目に評価できる点として、イタリア・ファシズム芸術の多様性と特異性が、これまであまり論じられることのなかった画家や建築家たちの作品の分析を通じて明らかにされていることが挙げられる。具体的には、フェリーチェ・カゾラーティの絵画、アダルベルト・リベラの建築などである。視点や解釈の仕方によって、あるいは政治的立場の違いによって、彼らの作品が、ある場合にはファシズム的、またある場合には反ファシズム的といった具合に、まったく逆に受け取られていたという興味深い事実が、精緻な作品分析によって明らかにされている。

とりわけわが国のこれまでのファシズム研究は、もっぱら政治からのアプローチに終始する傾向が強かった。こうした傾向に対して本論文は、ファシズムの政治的戦略を深く理解しようとするなら、その文化・芸術政策を解明することが不可欠であることを、はっきりと読者に印象付けることに成功している。政治と芸術とは相互に影響を与え合いながら、複雑な襞を刻んでいたのであり、それがナチズムとは異なるファシズムのきわめて興味深い特徴となっていたのである。その特徴を本論文は、ヴァルター・ベンヤミンとエルンスト・ブロッホの用語に借りて「多孔性」という概念で総括している。つまり、政治が芸術に、芸術が政治にそれぞれ風穴を開けることで、ファシズム文化の多様で多面的な顔が生み出された、というわけである。その新たなるファシズムの顔を、具体的な芸術作品と批評的言説の分析を通じて見事に描き出した、類例のない独創的で領域横断的な研究である。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文としての価値を有するものと判定される。また平成二十二年二月十二日、論文内容とそれに関連する事項に関して口頭試問を行なった結果、本論文を合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降